

〔第24回 学術集会 学術集会長企画〕

妊娠期の母親のアタッチメント・スタイルが産後うつ病に及ぼす影響と 3年後の家族員の相互作用を分析し、必要な家族支援を考える

東京女子医科大学看護学部

池田 真理

近年、出産後の母親10人のうち、1人から2人が抑うつ状態になると報告されている。筆者が行った研究では、妊娠期の母親が持つアタッチメント・スタイルが非安心型 (insecure) であると、産後うつ病発症のリスクが7倍にもなることが明らかになった。アタッチメントとは、心理発達領域で親密な情緒的絆について Bowlby (1969) が構築した包括的な概念である。アタッチメントは、対人関係やサポートを築く機能と深く関わり、精神療法など心理社会的介入の有効性の基盤をなすものとして注目されるようになってきている。乳幼児期の子どもをもつ母親への支援においては、母親の抑うつ状態のアセスメントが極めて重要な課題であり、育児支援の視点として子どもの気質や母子相互作用が注目されるようになってきた。そこで、筆者は妊娠期に研究対象とした母親をフォローし、3年後の子育て期に

おける抑うつ状態と、子どもの気質、母子相互作用、夫婦関係、父親の育児行動、妊婦のアタッチメント・スタイルとの関連を分析した研究を紹介した。母子相互作用については観察法を用い、夫婦関係と夫からのサポートなどについては、質問紙調査によって母親の回答をデータとした。母親の抑うつには夫婦関係と夫のサポートが関連していることが明らかになり、しかも、3年前のアタッチメント・スタイルと現在のそれを比較した結果、妊娠期に非安心型だった母親のうち7割がポジティブな方向に変化していた。このことから、出産・育児というプロセスにおいて夫のサポートや関係性の変化があると、母親のアタッチメント・スタイルをより安心型へと発達させることが示唆された。今後は夫への介入が課題であり、夫からの情報を含めて家族支援に取り組んでいく。

“片想いの家族員”問題と“妻たちの家族看護学”問題の提起

神戸大学大学院保健学研究科家族看護学分野・家族支援 CNS コース

法橋 尚宏

家族看護学は家族という組織を対象にするため、“片想いの家族員”問題と“妻たちの家族看護学”問題が存在し、法橋が国際的に問題提起しているが未解決のままである。例えば、患者の家族員を対象とした“家族員研究”、家族全体を対象とした“家族看護学研究”を区別できるようになれば、個人看護における家族支援と家族看護における家族支援の相違を明確にでき、家族看護学の発展に寄与できる。

家族の範囲は、家族員によって異なることがあり、自分は相手を家族員であると認識しているにもかかわらず、相手は自分を家族員であると認識していない状態 (片思い) が生じる。法橋 (2014年) は、家族員が認識する家族の範囲が家族員によって異なり、家族の範囲を特定できない問題を“片思い

の家族員”問題として提起した。

また、家族看護学は家族全体を対象とするパラダイムをもつにもかかわらず、研究や実践の対象者 (家族アセスメントツールの回答者、家族ミーティングの対象者など) は家族員個人となり、理論の水準 (家族全体) と方法の水準 (家族員個人) とで単位が異なる。対象者は妻 (母親) が多いことから、法橋 (2005年) はこれを“妻たちの家族看護学”問題として提起した。例えば、尺度を用いた質問紙調査では、ひとつの家族から夫 (父親) や妻 (母親) などが回答した得点を得られるが、必ずしも一致しないので家族全体としての得点を算出できない。妻 (母親) の回答で家族全体をとらえられないので、妻 (母親) 対象の家族看護となっている現状がある。